

公立大学法人札幌市立大学
第三期中期目標期間の業務実績に関する評価結果

令和6年9月

札幌市地方独立行政法人評価委員会

1 公立大学法人札幌市立大学の期間評価の方法

- (1) 期間評価は、「項目別評価」及び「全体評価」により行う。
- (2) 項目別評価は、中期計画の次に掲げる事項（大項目）ごとの実施状況の評価を行う。
 - ① 教育
 - ② 研究
 - ③ 地域貢献
 - ④ 大学運営
- (3) 項目別評価に当たっては、まず、中期計画の記載項目（小項目）ごとに、次に掲げるⅣ～Ⅰの4段階で評価を行う。なお、評価委員会の評価が公立大学法人による評価と異なる場合は、その理由等を示す。

Ⅳ：上回って実施している
Ⅲ：十分に実施している
Ⅱ：十分には実施していない
Ⅰ：実施していない
- (4) (3)の評価等を踏まえ、中期計画の大項目ごとに、次に掲げるS～Dの5段階で評価を行う。

S：特筆すべき進捗状況にある（評価委員会が特に認める場合）
A：計画どおり進捗している（小項目のすべてⅣ又はⅢ）
B：おおむね計画どおり進捗している（Ⅳ又はⅢの小項目の割合が9割以上）
C：やや遅れている（Ⅳ又はⅢの小項目の割合が9割未満）
D：重大な改善事項がある（評価委員会が特に認める場合）
- (5) 全体評価は、(4)の項目別評価の結果等を踏まえ、中期計画全体について総合的な評価を行う。

2 全体評価

(1) 総評

平成 18 年に開学した札幌市立大学は、「D×N」(ディー バイ エヌ、デザインと看護の両分野の連携)による特色のある教育・研究を行い、幅広い教養と豊かな人間性を有する人材を育成するとともに、地域に根ざした公立大学として、知的資源を活用した社会貢献にも取り組んできた。

第三期中期目標期間(平成 30～令和 5 年度)の業務実績としては、「項目別評価」において、教育、研究、地域貢献の 3 項目(大項目)が A 評価、大学運営の 1 項目(大項目)が C 評価となり、第三期中期目標期間の業務として、概ね順調に実施したものと評価する。

この第三期は、新型コロナウイルス感染症により、大学運営において大きな影響を受けた期間であったが、幅広い分野におけるデザイン能力の活用や地域包括ケアシステムの構築など多様なニーズや課題に対応し、地域や現場で活躍できる実践能力を備えた人材の育成に取り組んだ。また、令和 4 年には「A I T センター」が開設され、A I ・ I T などの先端技術を活用することで、より高度な研究と地域課題を踏まえ、社会において有用性の高い研究を推進してきた。

その他、教職員のワーク・ライフ・バランスの充実等の大学運営に関する事項に一部課題が見られたものの、外部機関と連携した業界・企業研究講座やインターンシップ等の取組を通じて、地元定着を推進した他、公開講座の積極的な開催や S D 研修による職員のマネジメント能力の向上などに取り組み大学を発展させてきたと言える。

(2) 評価内容

ア 教育

小項目数 13 のうち、Ⅳ評価が 6 項目、Ⅲ評価が 7 項目であり、高い水準で業務を実施しているものと認められる。

特に、地域や仕事の現場で活躍できる実践能力を養う「デザイン総合実習Ⅳ」にて、企業や外部機関との連携関係を構築し、毎年の成果指標を達成していることは高く評価できる（小項目 4）。

また、両学部における学生へのキャリア支援について、多様かつ精力的な対策が実施されており、毎年の成果指標を達成していることは、期間中の就職内定率が高く維持されていることも踏まえ、高く評価できる（小項目 9）。博士後期課程研究計画書審査を毎年継続的に実施できていること（小項目 8）についても、教育の質の向上に資するものとして、評価に値するものである。

イ 研究

小項目数 5 のうち、Ⅳ評価が 4 項目、Ⅲ評価が 1 項目であり、高い水準で業務を実施しているものと認められる。

特に、北海道や札幌市における地域特性・地域課題等に関する研究件数について、毎年の成果目標を大きく上回って確実に推進できていること（小項目 15）、「デザイン総合学習Ⅳ」科目から企業や外部機関との共同・受託研究へと発展させ、毎年の成果指標を達成していること（小項目 16）は、社会において有用性の高い研究を推進するという観点から高く評価できる。

また、新型コロナウイルス感染症による研究活動への影響がありつつも、デザインと看護分野が連携した研究を推進するための取組を継続的に実施し、毎年の成果指標を達成していることは、本学の特長を深化させるものとして、高く評価できる（小項目 14）。科学研究費助成事業への新規申請について、さまざまな応募支援の取組を実施し、毎年度 10%増及び 2023 年度の指標 90%を達成したことは、研究機関としての地位向上に資するものとして評価できる（小項目 17）。

ウ 地域貢献

小項目数 7 のうち、Ⅳ評価が 6 項目、Ⅲ評価が 1 項目であり、高い水準で業務を実施しているものと認められる。

特に、新型コロナウイルス感染症による活動機会への影響を受けつつも、産業界及び保健・医療・福祉業界等との連携や研究成果の知財化支援等の支援の充実、研究活動事例の紹介等により、地域産学連携協力の受諾件数が成果指標を上回っていることは、高く評価できる（小項目 19、25）。

また、学生に対する地元企業や医療機関等に関する情報提供（小項目 20）、公開講座や看護コンソーシアムの研修を通じた地域産業・医療を担う職業人のスキル向

上(小項目 21、22)により、地域産業及び地域医療への貢献を果たしていることは、高く評価できる。

エ 大学運営

小項目数 22 のうち、Ⅳ評価が 7 項目、Ⅲ評価が 12 項目、Ⅱ評価が 3 項目であり、概ね計画通りであるものの、一部遅れのある水準で業務を実施しているものと認められる。

特に、大学同窓会と連携した就業意欲向上の取組について、成果指標を大きく上回って達成していること、図書館機能の充実と機関リポジトリによる研究論文等の公表を着実に実現できていることは高く評価できる(小項目 27、30)。

また、多彩なSD研修が積極的に実施されていることは、職員の資質向上の観点から高く評価できる(小項目 36)。

教員研究の積極的なPRや「A I Tセンター」の新設、受け入れ体制強化の結果、受託研究・共同研究の受入件数が着実に増加し、成果指標を上回ったことは高く評価できる(小項目 39)。

(3) 今後の課題

・第三期中期目標において、国際化というのは重要な項目であると認識している。コロナ禍の大きな影響を受けた中でもオンライン対応の充実等の工夫を行ったことは評価できる点である。一方でコロナ禍前後を比較したとき、教職員と学生の受入・派遣人数は回復傾向にあるものの、成果指標に達していない。第四期中期目標期間においても、交流状況の改善を目指すことが望まれる(小項目 28)

・会議のオンライン開催による省力化、超過時間数の軽減については評価される一方で、有給休暇の取得率、特に教員の取得率が極めて低く、第三期中期目標期間を通して改善されていない。6月にアンケート実施等、対応されているとのことであるため、今後の改善に向けた効果的な方法を検討することが重要であると考え(小項目 32)。

・教員の公募は予定通りに行われている。基準を満たす人材を採用するため、一定の根拠があって採用の見送り、再任審査における不再任があることは理解できるが、その結果として定員を満たしていない状況については、危機感を感じている。円滑な大学運営に向けて、ワーク・ライフ・バランスへの影響も鑑み、現状の分析と人材を確保する方策の検討をしていただきたい(小項目 33)。

3 項目別評価

3-1 教育に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A

イ 判断理由

小項目すべてがIV評価又はIII評価であるため。

(参考) 集計結果

小項目数	評価結果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
13	0	0	6	7	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 中期計画を上回って実施している項目について、次のような点が挙げられる。

- ・両学部の学生が協働して地域課題に取り組む「学部連携基礎論」と「学部連携演習」について、着実な運営により、学生の地域の課題発見、解決提案する能力に対して成果を挙げており、評価できる。(小項目1)
- ・専門職業人としてのデザイン、コミュニケーション等の実践能力の向上について、学生評価が高く、評価できる。(小項目3)
- ・企業等と連携した課題を扱う「デザイン総合実習IV」が順調に実施され、毎年度成果指標を上回り、学生に社会で学ぶ機会を提供したことは、高く評価できる。(小項目4)。
- ・看護学部・助産学専攻科において、OSCEやシミュレーターを用いた実践型教育を滞りなく実施できていること、看護実践能力及び助産実践能力の到達度について、2020年度以降指標を達成していることは、高く評価できる。(小項目5)
- ・大学院博士後期課程において、研究計画書審査を継続的に実施できていることは、高く評価できる。(小項目8)
- ・両学部におけるキャリア支援活動について、多様かつ精力的な対策を実施していること、それにより高い就職内定率を維持していることは、高く評価できる。(小項目9)

- ・留学生の日本語能力の向上を目的として、講座を実施しており、外国人研究科生及び外国人研究生の日本語能力の向上に寄与しており、評価できる。(小項目 13)。

(イ) (ア)のほか、次に掲げる点が注目される。

- ・学生のメンタルヘルスに関する教職員向け研修，ならびに新任教員に対するメンターガイダンスの実施など、十分な取組がされており評価できる。(小項目 12)

イ 遅れている点

特になし

(3) その他の評価委員会からの主な意見等

- ・これまでの学生の各種能力取得については、卒業時アンケートのみで評価しているが、この評価方法だけで教育効果を判断するには疑問が残る。そこで、これらの評価の妥当性を証明するために、同一の自己能力評価アンケートを入学時に実施して、卒業時と比較検討できるようなアンケート実施体制の導入が期待される。(小項目 1、2、3、7)
- ・評価指標が5段階か10段階かは、期間を通して統一しておいた方が良い。(小項目 5)
- ・デザイン研究科の回答率と満足度の両方が低いことについて、分析が必要かと思う。(小項目 7)
- ・バリアフリー化の妥当性について、満足度を調査する等の分析が必要かと思う。(小項目 11)

3-2 研究に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A

イ 判断理由

小項目すべてがIV評価又はIII評価であるため。

(参考) 集計結果

小項目数	評 価 結 果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
5	0	0	1	4	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 中期計画を上回って実施している項目について、次のような点が挙げられる。

- ・デザインと看護の両分野が連携した研究を推進するための取組を継続的に実施し、毎年の成果指標を達成していることは、高く評価できる。(小項目 14)
- ・地域特性・地域課題等に関する研究が推進され、指標を上回る件数の研究を実施していることは、高く評価できる。研究の推進を図るために、学術奨励研究費、共同研究費、学内競争的資金で応募者を募り、確実に指標の件数の研究を推進できている。個人研究費でさらに多くの研究がなされていることから、次年度以降も期待できる。(小項目 15)
- ・企業や外部機関との連携による課題研究を継続的に実施していること、2023年度には2件実施していることは、評価に値する。(小項目 16)
- ・科学研究費助成事業への新規申請について、さまざまな応募支援の取組を実施し、毎年度10%増、2023年度90%の指標を達成していることは、高く評価できる。(小項目 17)

(イ) (ア)のほか、次に掲げる点が注目される。

- ・指標を十分に達成している。ただ、2022年度は同指標で計19件の実施結果であったため、次年度以降はさらなる研究成果の拡大に期待する(小項目 18)

イ 遅れている点

特になし

3-3 地域貢献に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A

イ 判断理由

小項目すべてがIV評価又はIII評価であるため。

(参考) 集計結果

小項目数	評価結果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
7	0	0	1	6	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

- (ア) 中期計画を上回って実施している項目について、次のような点が挙げられる。
- ・各種の出席への来訪者の人数から地元で関心を寄せられていることが推測され、研究成果の特許出願も精力的で評価できる。産業界及び保健・医療・福祉業界等からの地域産学連携協力依頼の受諾が目標の8件を大幅に超えて13件もあることはデザイン学部の勢いを感じ、高く評価できる。(小項目 19)
 - ・中小企業家同友会や医療機関・地方自治体との連携協力による学内キャリア説明会やインターンシップなどを継続的に実施できたことは、地域への人材輩出につながる重要な取組であり、高く評価できる。(小項目 20)
 - ・職業人向け公開講座の実施について明確な数値目標を設定し、それを上回る実績を達成した点が高く評価できる。今後はこうした公開講座が「地元企業等の競争力強化」や「地域の専門職の資質向上」等への寄与に繋がることを期待したい。(小項目 21)
 - ・看護コンソーシアムの市内病院等と連携を通じて、保健医療福祉における看護職の人材育成を施設横断的に行い、毎年度成果指標を上回る評価を得られたことは、看護の質の向上に資する取組として、高く評価できる。(小項目 22)
 - ・札幌市からの受託・共同研究及び地域産学連携協力依頼件数について、年度による変動はあるものの、指標をほぼ達成できていることは評価できる。(小項目 24)
 - ・地域産学連携協力依頼について、公式ウェブサイトの「教員研究紹介」、「研究・活動事例集」の活用した広報活動等により、成果指標をほぼ毎年上回って受諾し

たことは評価できる。(小項目 25)

(イ) (ア)のほか、次に掲げる点が注目される。

- ・市民向け公開講座について、成果指標はほぼ達成されている。コロナ禍であったことを考慮すると、よくできたものと評価できる。(小項目 23)

イ 遅れている点

特になし

(3) その他の評価委員会からの主な意見等

- ・公開講座について、「市民がより良い生活を送るための新しい知見を獲得できるような生涯学習の機会提供」の観点から、受講者満足度の維持向上に期待する(小項目 23)。

3-4 大学運営に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

C

イ 判断理由

小項目においてIV評価又はIII評価が9割未満であるため。

(参考) 集計結果

小項目数	評 価 結 果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
22	0	3	12	7	86.4%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

- (ア) 中期計画を上回って実施している項目について、次のような点が挙げられる。
- ・外部機関や他大学等との連携の場としてのサテライトキャンパスの利用者数は、コロナ禍の影響を受けたものの、2023年度には回復しており、全体としては評価できる。サテライトキャンパス活用による、学外機関等との連携の更なる増加に期待したい（小項目26）
 - ・同窓会との連携により、卒業生・修了生の講演会等が多数開催され、その参加人数もほぼ毎年指標を大きく上回っている。在学生の就業意欲向上等、キャリア教育に繋がるものであり、高く評価できる。（小項目27）
 - ・図書館機能の着実な充実と機関リポジトリによる研究論文等の公表を実現していることは、高く評価できる。（小項目30）
 - ・教育改善に資するFD研修について、ほぼ毎年度成果指標を上回って実施できており、2023年度受審の大学認証評価結果において、FD研修活動が「優れた点」として付されたことは評価に値する。（小項目35）
 - ・毎年度成果指標を上回っていることに加え、オンライン研修の積極活用、他大学への派遣等、積極的にSD研修がされており、高く評価できる。次年度以降の継続を期待する。（小項目36）
 - ・教員研究の積極的なPRやA I Tセンターの設置の結果、受託研究・共同研究の受入件数について、成果指標を上回っていることは、高く評価できる。次年度以降のより高い指標設定、研究受入の継続に期待する。（小項目39）
 - ・成果指標を上回る実施の継続、様々な分野における安全管理体制の強化は、高

く評価できる。引き続き防災対策の強化に期待する。(小項目 42)

(イ) (ア)のほか、次に掲げる点が注目される。

- ・進学相談会、出前授業、個別の見学対応と、多様な情報提供の機会を提供できていることは、評価に値する。オープンキャンパスについては、オンラインまたはハイブリッド開催等、希望者全員が参加できる体制の整備に期待する。(小項目 31)
- ・成果指標の達成にあたっては、環境要因やLED照明導入等の影響も考えられるが、教職員の意識が貢献していると想定されるため、引き続き、省資源・省エネルギーへの取組みに期待する。(小項目 43)
- ・コンプライアンスに関する研修、障がい者差別解消法に係るeラーニング等の各取組は、評価できる。全教職員の積極的な受講が望まれる。(小項目 45)

イ 遅れている点

- ・大学の国際化は第三期中期目標期間における重要な観点と考えるが、これに係る国際交流については、コロナ禍の影響により停滞した。今後一層の取組に期待したい。
また、国際交流は双方向かつ多方面のアプローチが必要であり、派遣だけでなく、受入件数の増加や連携学術機関の広範囲化にもより強く意識をもっていただきたい。(小項目 28)
- ・成果指標の会議の件数はやや満たしていないが、遠隔形式の会議の恒常化による業務の効率化や職員の超過勤務時間削減等は評価できる。一方で、教員の有給取得率の改善を実現できなかった点に関して、ワーク・ライフ・バランスを考慮し、学内アンケートにおける教職員の意見を踏まえた対応策の検討に期待したい。(小項目 32)
- ・適切な教員採用手続きを行っているものの、公募人数が多くまた公募をしたが採用に至らなかった。円滑な大学運営に向けて、現状の分析と人材を確保する方策の検討が重要であると考え(小項目 33)

(3) その他の評価委員会からの主な意見等

- ・社会のトレンドを意識し、大学での学習や研究成果をどのように社会で活用できるか、役立てられるかという点を意識した情報発信の強化が必要と考える。また、市民意識調査における認知度が前回実施時よりも減少した原因の分析と、それを踏まえた更なる広報活動を期待する。(小項目 29)
- ・受講に関して、延べ人数だけでなく、全教員が1回以上参加していることが分かるような指標を加えていただけると、教員の資質向上に繋がっていることが評価できると思われるため、検討いただきたい。(小項目 35)

- ・成果指標の「年度計画のうち「教育」「研究」「地域貢献」に関する目標の全項目に成果指標を設定する」ことは、2018年度から実施できているため、今後の成果指標の設定の際は、より内容に踏み込んだ目標設定とすることに期待する。(小項目 38)
- ・省エネ設備の導入にあたっては、学生も含めた大学関係者の業務や研究のパフォーマンスの向上に支障がでないようご留意いただきたい。(小項目 43)
- ・「ハラスメント防止セミナー」の受講率がやや低いと感じるため、受講の義務化を検討いただきたい。(小項目 45)
- ・2024年度は、大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法が変更することに伴い、一般選抜において対応が求められるため、綿密な準備を行った上で、円滑に実施されるよう期待する。(小項目 47)